



「電友の会だより」 (空っ風通信)

「上毛電鉄友の会」の会報誌

第16号



Joden Supporters Club

赤城山麓を走る電車

上電が設立されたのは大正15年(1926年)の5月27日。
84年目を迎えた2010年の設立記念日に、地域の足である上毛電鉄の末永い運行を目指して「上毛電鉄友の会」は発足いたしました。
上電は、いよいよ設立90周年を迎えました。上電友の会も100周年に向け、コツコツと上電とともに走り続けます。

挨拶 会報第16号発刊にあたって

2年近く悩まされてきた新型コロナウイルスは、昨年末からオミクロン株が各国で流行し、日本でも、新年早々から感染者が、今まで以上に再拡大しました。政府や自治体は、医療体制の確保と3回目のワクチン接種を急ぎ、再度の病床逼迫や感染する子ども達の急増等、不安な日々が続きましたが、上毛電鉄の社員や友の会会員の皆様は、ご健勝で日々活躍なされておられることをお祈りしています。

長引くコロナ禍の深刻化している課題として、外出自粛や公共交通利用の制約が度々唱えられてきた中で、地方の鉄道や路線バスがさらなる縮小の危機にあることです。群馬県では、路線バスが多くの成人の移動手段の選択肢として消えつつある傾向を感じますが、昨年以降、全国数十の地方都市で、路線バスの減便や廃止を伴うダイヤ改正が行われてきました。また、昨今、車両の検査と故障が重なって、1編成だけで運用しているという銚子電鉄の苦境や、利用者の減少で経営苦境の地方鉄道の今後のあり方を、国が抜本的に検討し始めることが報道されています。

公共交通に関わる議論は、これまで大都市の事情に合わせて都合良く進められることが多く、地方都市や中山間地域では、常にそのしわ寄せを受けてきたように思います。コロナ禍でそれが一層加速され、交通利用がさらなる家用車一辺倒に進むことが危惧されます。1日も早いコロナ禍の収束を願うと共に、上毛電鉄をはじめとした地方のローカル鉄道や路線バスを応援する本会として、その利用促進と経営の定常的安定を祈りながら、巻頭の挨拶とさせていただきます。

(上毛電鉄友の会代表 大島登志彦)

報 SUPERBELL"Z 近況報告

SUPERBELL"Z 堂込聖美です。

本年はSUPERBELL"Zも少しずつ、配信などの新しい形を含めて活動を再開し始めております。(野月貴弘さんとは、NHKラジオ第1「てつたび」「らじるラボ」でお耳にかかることも多いのではないのでしょうか。)

昨年7月に配信限定のライブを、また去る2月12日に、東京渋谷でベルズのライブワークとも言える「鉄道ナイト」というイベントが、一年半ぶりに開催されました。上電新春イベントでもお馴染みの南田裕介さんを始め多数のゲストにお越しいただき、また配信では遠方のお客様にもご覧いただくことができ、お陰様で盛況と相成りました。

とはいえ、まだまだ密になるイベント開催は難しい面もあり、何らかの形で上電に還元できる方法はないか、個人でも思案中です。

(堂込聖美)



SUPERBELL"Z

野月貴弘:NHKラジオ第1「てつたび」「らじるラボ」レギュラー出演ほか、鉄道ファン誌ライターなどにて活動中
堂込聖美:「てつたび」レベラーにて上電に乗車ほか、ドラマやアニメの吹き替えなどにて活動中

催 あつまれ!SDGs! @桐生



2021年10月31日桐生市新川公園に於いて、ESD活動拠点きりゅう市民活動推進ネットワークが主催する環境イベント「あつまれ!SDGs!」が市政100周年記念事業の一つとして開催されました。

新型コロナウイルスの感染拡大後はイベントの多くが中止になり、久しぶりの開催でしたので、2000人以上の参加者で大賑わいとなりました。当会は、2015年からの生活交通をつくる会、わたらせ渓谷鐵道(株)と隣り合わせでの出展を行いました。当会の出展場所付近では、わたらせ渓谷鐵道のミニトレインが走り、環境に良いシャボン玉づくりや、2019年秋に桐生市が宣言した「ゆっくリズムのまち桐生」に伴うナローモビリティの展示の他、生ごみ消滅器「キエーロ」の組み立て体験、NPOによる木工製品の販売などが行われ、沢山の親子連れが歓声を上げていました。会場運営には、桐生周辺の高校生約60名が活躍して出展者を支援してくれました。(佐羽宏之)



友の会法人会員の群馬県立前橋高校鉄道研究部同窓会では、この日が衆議院議員選挙に当たり、市職員の会員が参加できない中、友の会の出展を引き受けさせて頂きました。大島代表の出席のもと、上電所有のパネルの展示、チラシの配布、友の会の案内などを行いました。加えて、同窓会が発足する前にOB有志で製作し、現在同窓会が所有する桐生球場前駅付近を再現したT-TRAK規格のNゲージ鉄道模型ジオラマの展示も行いました。模型の形状や屋外という環境上車両は走らせられませんが、細部まで拘った表現で来場者の皆様楽しんで頂けたようです。私自身桐生でのイベント出展は今回が初めてでしたが、終盤には八木節の演奏が始まり、来場者が自然と輪になって踊り出す桐生らしい雰囲気を感じることができ、少し感動しました。同時にコロナ禍に入り、2年弱一切イベントに参加できていませんが、やはりこうした地域のイベントはいいものだなと改めて感じた所です。心置きなくイベントができる日が一日も早く来ることを祈念し報告と致します。

(片桐正人)



●上毛電鉄こと始め

上毛電鉄(以降上電と略す)を知ったのは、中学生になって間もない14才のころと思う。

今考えても、どうしてこんな書類を目にしたのかも、よく覚えていない事から始まる。

1949(昭和24)年7月付のもので、上毛電鉄社長「五十嵐小太郎」殿に宛てた、東武鉄道社長からの「電気機関車運転承認」の申請書であった。

内容的には東武桐生線の貨物列車の貨物量が増えて、蒸機では対応がむずかしくなったので、これを電機として、輸送を確保したい。そのため、新大間々(現赤城)駅構内で入れ換えのため、電機が入線するというものであった。電機は、東芝製凸形のED450形451(のちの4020形4021)号で、竣功図付書類であった。

そんな事から、上電はどこに、と鉄道路線図を見るようになる。そんなことから、どうして小さな事柄まで、いちいち承認を受けなければいけないのかと、妙な感じを持ったものだ。

東武鉄道へ入社して間もない1960(昭和35)年9月、東武から上電へ譲渡した電車デハ81(元デハ2形10)号が、まだ現役で働いていることを知る。早々に自分の目で確認したくて、大胡を訪ねる。これが上電への最初の遠征でした。この時言われた言葉が、忘れられない。

譲り受けた時のデハ81号は、故障ばかりしていたので、「こんなボロ電、引き取ってほしい」と、何度も申し出たという。まことに申し訳ない限りであった。



デハ81号(粕川) 撮影:園田正夫

●興味を誘った電車達と山岳夜行

そんな大胡で、デハ81号に限らず、元信濃鉄道の最初の電車デハ801号や、興味ある電車達を、次々目にしたことで、上電へ出掛けることが多くなる。

この少し前の1957(昭和32)年7月21日、赤城登山鉄道が開通する。かつて新宿から夜行バスで



デハ801号(大胡)

スケート等に行った赤城山が、グーッと東京に近くなった気がした。山岳夜行も、どんどん運転される。お客さんが多い時には、増発も続いた。夜行を待つ人たちに、浅草駅構内はいっぱいになった。

78系や54系のロングシート車に、長椅子を車内中央部に運び込んでまで対応した。そんな夜行列車を、よく利用した。赤城駅前のバスターミナルが、乗車を待つ人達で埋ったのを、なつかしく思い出させる。

赤城山へは、気軽に行けるようになり、当然、上電を利用することも多くなった。



長閑な大胡駅での交換風景

後に転勤して、館林検修区(東武)に移る。

勤務には、泊りがあって、何もなければ、翌朝に後の人に引き継ぐ。それを「明け」と呼んでいたが、その後は自分の時間になる。家へ帰って休める、がその時間を利用して、よく館林～赤城～中央前橋経由で、国鉄(現JR)の前橋



上電へ甲種回送される西武電車(太田)

へ出て、住いの新宿へ帰った。疲れなどまだ感じなかった時代だ。そんな時、利用した上電は楽しかった。

ある時、太田を通りかかると、貨車に挟まれた西武電車が目に入る。オヤツと思ったが、後に上電で走る電車であった。

●東武にやってきたデハ161号

そんな中、上電のデハ161号が東武西新井工場の入換車になるべく、譲り受けることになる。さっそくどんな電車なのか、見に行ったこともある。

やがて東武にやってくるが、まず杉戸工場で入換用に改造される。驚いたのは、東武最初の電車デハ5号(博物館展示)の部品が一部使用されていた事であった。勿論、展示される前の出来事であった。

デハ161号は、入換車ではなく工場の機械扱いで、車籍には入らなかった。

入れ換えには力が無く、運転しづらかったという。

一方、一時西武電車で埋められていた上電には、東武の3000系統がお世話になり、さらに京王の3000系ステンレス車時になり、今日を迎えている。

(花上嘉成)



デハ161号(赤城)

写真は特記以外、筆者撮影

募

枕木オーナー(1期生)募集中!

上電では2022年10月末まで「第一期生」のオーナーを募集しています。友の会でも令和4年度予算で計上予定で、ささやかなご協力をいたします。

1口一万円(税込)。会員の皆様も、個人・グループのいずれでも、また、お一人様何口でもOKで、上電との絆を強く感じていただくと幸いです。

プレート設置日から2年間、大胡車庫の線路上に皆さまからの熱い応援メッセージ(10文字以内)などが披露されます。WEB、郵送、FAXで申し込みいただけます。詳しくはHPを参照ください。(新保正夫)



編集後記

私の上電の一番古い記憶は、幼いころ母親と乗った上り列車です。車掌さんから切符を買わなければいけないのに、なかなか車掌さんが来なくて、ひとりソワソワしていたように思います。今の子供達も、こんな風の上電の記憶を語る時が来るでしょうか。その時も、「いま」の上電と比べてみるのでしょうか。

上電がいつまでも走り続けるための手助けを、友の会は続けます。活動の趣旨にご賛同いただき、新年度も会員継続をいただきますようお願いします。(太田聡彦)

発刊 上毛電鉄 友の会 2022.3
 WEB <http://www.jomorailway.com/supporters/>
 Facebook <https://ja-jp.facebook.com/jyodontomonokai>
 E-mail supporters@jomorailway.com